

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年4月23日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320072

研究課題名（和文） 先住民アイヌの立ち位置と日本「内地」－台湾原住民、パラオ先住民との比較研究

研究課題名（英文） Position of Ainu in Empire of Japan – A comparative study with Taiwan aborigines and Palau natives.

研究代表者

李 建志（LEE KENJI）

関西学院大学・社会学部・教授

研究者番号：70329978

研究成果の概要（和文）：

本研究の成果は次の3点にまとめられる。(1) アイヌが日本に組み込まれていく過程を考察するために、同じく日本が支配した台湾やパラオの先住民と比較する。(2) パラオの場合、北海道と同様に日本人（本土＝「内地」人）が大量に移住し、現地のひとびとをマイノリティ化させていったが、敗戦後日本に引き揚げ、再びパラオ人の国にもどっている。この過程を研究することで、近代以降に北海道とアイヌに起きたことを想起させる。また、引き揚げたあとの日本人たちの研究も行う。(3) 南洋で働いていた朝鮮人の行動と、現在のパラオでの生活を視野に入れることで、日本の南洋支配の構造をより深く理解する。

研究成果の概要（英文）：

We achieved good results by this study. 1) We have compared Ainu with Taiwan aborigines and Palau natives where areas and peoples had been ruled by Empire of Japan for researching the process of domination of Japan. 2) In Palau, Palauan had come to be minority, because many Japanese colonists emigrate to Palau and NANYO for reclaiming lands. But they had gone to Japan after W.W. II. We studied this process to think that Ainu have come to minority of Japan. 3) We have achieved Koreans in NANYO who worked at military establishments before W.W. I. Because, if we know Koreans position in NANYO, we will understand the structure of NANYO government on racial domination.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2010年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2011年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
年度			
年度			
総計	12,000,000	3,600,000	15,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目： 文学・各国文学・文学論

キーワード： 先住民 引揚者 アイヌ 台湾原住民 パラオ 開拓地 ライフヒストリー 敗戦

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の戦前期における植民地および委任統治領など（いわゆる「外地」と呼ばれていた地域）に対する支配体制を、主に移民する日本人と、現地のひとびとの関係で考えることを主眼とした。アイヌもパラオの島民も、もともとはその土地の主人公でありながら、大日本帝国の支配の過程で日本人（あるいは朝鮮人、台湾人）といったひとびとが流入し、たちまちマイノリティ化してしまった。そしてアイヌに関しては現在のような先住民の位置に立たされてしまう結果となった、と考えて、その原点としての大日本帝国の人的移動について、主にパラオと台湾、北海道での人的移動を中心に考えることを計画した。そのなかで、移動する側だけではなく、受け入れ側（自発的ではないにしろ）の立場が複雑化する過程をより重要視することとする。

(2) また、旧外地（大日本帝国が植民地あるいは租借地、委任統治領として支配していた地域を主に指す）にどのような日本人が渡航していたのか、どのような開墾をしていたのか、その支配の過程で日本「内地」人（日本の本土を中心とした地域に住むひとびと）と沖縄系のひとびととのあいだにどのような緊張関係があったのかなども研究対象になる。さらには、南洋の支配地における朝鮮人や台湾人といったひとびとがどのような位置づけをされていたのかも、未開拓の研究分野として開かれており、戦前から戦後の引き揚げにいたるまでを対象としてリサーチを行うことを計画した。

2. 研究の目的

(1) 先住民問題といえば、どうしても人権問題が全面に出がちだ。もちろん、現在の先住民たちの生活問題が最も大切なことであることは疑いがないが、学術的に研究する際にもっと大事だと思われることは、いかにしてこの日本という国に先住民が「誕生」したか、ということではないか。すなわち大日本帝国のケースで先住民がいかに認識されていたか、またいかに先住民が自らを先住民だと認識するようになったかという過程あるいはプロセスなどを考えることなのでは

ないか。そのためには、大日本帝国の外地支配過程で少数民族＝先住民化したパラオの島民とも比較しながら考察することが必要なのではないかと考え、このテーマに結実した。先住民問題というと、とかく人権問題へと傾斜しがちであるが、どちらかということ、その「先住民」の定義の方が問題なのではないかと考えるからだ。

(2) また、アイヌなどは北米でのネイティブアメリカンなどに比較されがちだが、近代以降に急激に先住民化したという事実に鑑みれば、その間には類似点より差異点が多く見られる。アイヌやパラオ島民の先住民化の過程を、北米の先住民の状況と比較することで、「比較先住民学」とでもいうべき学問が成立するのではないかと、という問題意識もこの研究をはじめるとき大きな目標であった。先にも述べたように、北米のネイティブアメリカンという先住民の問題は、のちに北米大陸にヨーロッパ人を中心とした多くの移民が訪れ、北米のネイティブアメリカンをマイノリティ化＝先住民化していったという背景がある。日本のアイヌのおかれた位置は、その状況にとっても似ているが、近代以降に急激に北海道へと和人（「内地」の日本人）が訪れたという面から考えると、アメリカでの状況と単純には比較できない。その特殊性をより精密に研究する必要があると考える。この問題を考えるために、あえてパラオの島民の置かれた位置（アイヌよろしく、急激にマイノリティ化＝先住民化することとなった大日本帝国の支配地のひとびとという共通項があるため）と、その状況を重ね合わせて考えることが必要なだと信じるからである。

(3) 以上のような、(1)と(2)の研究の延長線上で、日本人の移民がどのような選別を経て、どのようなプロセスで外地に流出していったのかという問題をも視野に入れて考える。この日本人側からの問題を入れることで、かたよりのないより中立的で立体的な結果を得られると考えたからである。もちろん、そのひとびとがどのようにして戦後に日本に帰ってきて（引き揚げて来て）、どのようにして日本での生活を切りひらいていったかという問題もその視野に入るものである。

3. 研究の方法

3人の研究者によって研究組織が立ち上げられ、それぞれの専門性から、台湾、パラオ、北海道、そしてパラオの関係者が住んでいる沖縄、宮崎県、宮城県、鹿児島県種子島などに直接で出向いて聞き書きをあつめて来るというインタビュー形式の質的調査、すなわちライフヒストリー調査を主とし、さらに歴史的な背景や文献の渉猟などにつとめることとした。研究代表者の李は人文系の研究者であるため、まず文学研究的な手法（ナラティブの分析、文献の渉猟とその分析など）を中心に行っていく。そして、朝鮮研究をするという特性を活かして、南洋や北海道、台湾での朝鮮人の活動や、その子孫で南洋などに定着しているひとびとのことを調査することを旨とする。上水流は人類学および台湾文化研究の知見を活かして、台湾における原住民の位置を、漢族（内省人および外省人）の立場から逆照射するという視点を維持した上で原住民研究を行い、さらにはパラオでの台湾系に関するイメージとその歴史的な考察を担当する。さらに、齋藤は観光学という専門性を活かし、日本におけるパラオからの引揚者などがいかにして生きてきたかを考えることや、それを使っていかに未来志向のまちづくりができるかなど、まったくちがった側面からのアプローチを目指す。

4. 研究成果

(1) 研究の過程で日本人の南洋への移民たちがいかなる生活をしてきたか、どのようにして南洋に移り住んだか、そしてどうやってかえってきたのかという問題に逢着した。この引揚者の問題は今まで学術的なメスがほとんど入ったことのないものであり、ここからパラオのひとびとの交流を浮き彫りにすることはもちろん、むしろ日本人たちの戦後の動きなどを刻銘に聞き取ることができた。これは今までにないものであり、特筆できる大きな業績だ。具体的には、パラオを中心とした南洋からの引揚者は、1946年以降に宮崎県小林市環野地区、宮城県蔵王町北原尾、鹿児島県熊毛郡中種子町および南種子町にまたがる原尾地区といった3つの大きな開拓地を造営した。彼らの戦後の生活史は、ある意味で戦後日本とはなんだったのかを考える新しい視点を提供するものだといえるほど、その戦後の開拓の歴史は深く、またあまりにも研究がされていない手つかずの状態であったため、ここでの数多くの聞き取り調査は、これから学術書として広く公開することで、日本の戦後研究および引揚者

の研究に対して一石を投じることができる」と自負している。

(2) さらに、南洋での朝鮮人たちの行動などについてはまったくといっていいほど調査がされてこなかったという実態が分かってきた。本研究の最終年度での調査のうち、ほとんど最後の調査にいたってはじめて、パラオに定着した朝鮮系のひとびとと出会い、彼らの話を聞き出すことができたことは大きな仕事への第一歩になったといえよう。実際、多くの時間を割いて探し求めた朝鮮系のパラオ人からは、朝鮮人がいかにしてパラオへとやってきたか、そしてどのような生活をしてきたか、どうやって戦後のパラオを生き抜いたかといった疑問を解くインパクトの強いものであった。この問題は、さらなる調査を重ね、もっと多くのインフォーマントに出会って話を広げていくなど、将来的にも継続して研究を進める予定である。

(3) パラオからの引揚者は福島県民が多く、また福島県から北海道への移民を経てパラオへ再移民したというひとが多かった。すなわち、パラオの問題と日本の北方（アイヌ問題）とが歴史的に交差しているのである。具体的には最初は朝鮮系や沖縄系をパラオに連れて行き、作業させていた南洋興発（国策会社、北の満鉄、南の南興と呼ばれる）は、相次ぐストライキによって、会長の故郷である福島県に目をつけ、その後は福島県をつてをたどって南洋に日本人の開拓民を送りこんだ。貧しい東北の一県は、沖縄や朝鮮のような「外部」ではない、日本「内地」のなかの周縁部として、北海道、そしてパラオへと送りこまれたのである。この福島の問題は、北海道開拓の問題とからみつつ、近代日本の根っここの問題（会津藩に対する明治政府の対応から、北海道開拓に対する問題、さらには北海道での失敗者を南洋に送りこむという複合的な経緯など）と、開拓される北海道＝アイヌの故地、南洋＝委任統治領にして島民たちの故地に関する戦前の対応などを概観するためにとてもいい材料となったと自負している。

(4) この研究成果は、パラオにおけるパラオ人の位置、そしてそこに対する日本「内地」人たちの意識と立ち位置、さらには沖縄系の微妙な立場など、聞き取り調査の内容を中心に、さらには南洋における朝鮮系の人びとの研究を追加して、それと比較する立体的なものとする予定である。もちろん、日本国内における南洋からの引揚者たちの開拓地（宮崎県小林市環野地区、宮城県蔵王町北原尾、鹿児島県中種子町・南種子町原尾地区）での聞き取り調査なども大きく取り上げ、南洋移民

研究と引揚者研究、在日朝鮮人研究、パラオ研究などはもちろん、南洋移民の主体をなす沖縄系と福島県民の問題や、福島県民が北海道を經由して南洋に開拓移民した事実などを明らかにする研究書籍として大学出版部などから公刊する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 齋藤由紀、グローバル化する世界の中での先住民、少数民族の立ち位置についての一考察
～北海道、台湾、パラオでの調査報告～、平安女学院大学研究年報、査読無、11号、2012年、印刷中
- ② 上水流久彦、「周辺」にみる国民国家の拘束性—台湾人の八重山観光を通して—、北東アジア研究、査読有、20巻、2011年、51-66
- ③ 上水流久彦、対馬海峡から見る台湾と八重山の「交流」、白山人類学、査読有、14巻、2011年、22-35
- ④ 上水流久彦、台湾東部と沖縄先島諸島にみる越境現象、世新大学日本語文研究、査読有、1巻、2009年、21-36

[学会発表] (計 6 件)

- ① 李建志 齋藤由紀、点から線への町おこし—パラオ帰還者を繋げることで起こす町おこしの可能性について—、総合観光学会第19回全国学術研究大会、2010年12月12日、日本大学商学部
- ② 上水流久彦、台湾漢族社会における通時的分析資料としての訃聞の可能性、日本華僑華人学会第3回研究会、2010年12月4日、東亜大学
- ③ 上水流久彦、対馬海峡から見る台湾と八重山の「交流」、フォーラム「台湾をめぐる境域」、2010年11月6日、東洋大学
- ④ 上水流久彦、訃聞にみる台湾漢族の親族觀念の変遷、日本文化人類学会第44回大会、2010年6月13日、立教大学

⑤ 上水流久彦、台湾東部と八重山との観光交流にみる自画像と他画像の差異、交錯する北東アジアアイデンティティの諸相研究会ワークショップ、2010年3月15日、島根県立大学

⑥ 上水流久彦、台湾東部と先島諸島にみる越境—観光にみる相互理解の差異、日本文化人類学会第43回研究大会、2009年5月30日、国立民族学博物館

[図書] (計 7 件)

- ① 李建志 齋藤由紀他著 荻野昌弘 島村恭則編、新曜社、引揚者の戦後 戦争が生み出す社会2、2012年、印刷中
- ② 上水流久彦他著 佐藤幸人編、アジア経済研究所、交錯する台湾、2012年、374
- ③ 上水流久彦他著 高谷紀夫編、東北大学出版会、つながりの文化人類学、2012年、341
- ④ 上水流久彦他著 植野弘子他編、風響社、台湾における〈植民地〉経験、2011年、347
- ⑤ 上水流久彦他著 佐藤幸人編、アジア経済研究所、台湾総合研究Ⅲ—社会の求心力と遠心力調査研究報告書、2010年、162
- ⑥ 上水流久彦他著 鈴木正崇編、風響社、東アジアにおける宗教文化の再構築、2010年、487
- ⑦ 上水流久彦他編、風響社、交渉する東アジア—近代から現代まで—崔吉城古希記念論文集、2010年、279

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李 建志 (LEE KENJI)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：70329978

(2) 研究分担者

上水流 久彦 (KAMIZURU HISAHIKO)
県立広島大学・地域連携センター・助教
研究者番号：50364104

(3) 研究協力者

齋藤 由紀 (SAITO YUKI)
(H21年—H22年 研究分担者)